

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 277

「君と僕のあいだにある」関係が

世界貿易センタービルとともに倒壊していく

作家の辻仁成が小説を書いている。作家が小説を書くのは当然で、そこに何の不思議もないが、その小説は、ニューヨークの世界貿易センタービルへのハイジャックされた旅客機の突撃、ビルの倒壊等のテレビ映像を見ていた我々の中の一人を取りだして、彼についての出来事を描いてみせている。エッセーやコラムや小論文で同時中枢テロに言及する学者や評論家の文章は、目が拒絶反応を起こしたくなるほど溢れ返っているが、これまで小説ではお目にかかったことはない。的を射ているかどうかは別にして、同時中枢テロについての自分の考えをそのまま紙面にすべらせていくのは、それほど難しいことではない。その気になっていくつかの他人の文章を読んでいけば、自然に自分の考えのようなものが触発されながら浮かび上がってきて、まとまった文章が白紙の上に押しだされていく。

ところが、小説となると、そういうわけにはいかない。いくらかの工夫がなされなければ、エッセーとしては読めても、小説としてはとても読めたものではない。つまり、どのような工夫を凝らすかが勝負であって、＜同時中枢テロが突きつけているなにか＞が作品としての工夫の中に引きだされることによって、その工夫の中でその＜なにか＞が隆起しはじめ、作品世界の中で生き永らえていかななくてはならない。辻仁成の小説の題名 - 『君と僕のあいだにある』（『新潮』01・11）に即していうと、「君と僕のあいだに」＜自爆テロ＞が映像として飛び込んできたのだ。いや、作者は「君と僕のあいだに」、強引に＜自爆テロ＞の映像を飛び込ませたのである。＜自爆テロ＞と化した旅客機が強引に超高層ビルに突っ込んだように。

「君と僕の」関係にとって＜自爆テロ＞の映像は、もちろん無関係である。旅客機に突っ込まれる前の世界貿易センタービルと旅客機が全く無関係であったように、だ。しかし、私たちが住んでいる世界では、一方が他方に強引に突っ込むというかたちで、無関係という関係の表皮が無理矢理剥がされていく出来事に私たちは度々襲われる。世界貿易センタービルと＜自爆テロ＞と化した旅客機の強引な出会いだけではない。なによりもテロリストに乗り取られた旅客機の乗客たちの、テロリストとの不幸な出会いがそうだ。乗客たちは飛行機に乗りさえしなければ、テロリストに出会う確率は生涯のうちでほとんどゼロに等しかっただろうからだ。世界貿易センタービルに旅客機が突っ込んでいるテレビ映像が、受信機を通じて全世界のお茶の間に突っ込んだ、とおそらく作者は捉えようとした。実物と異なって映像だから、なんの影響も及ぼさないようにみえるけ

れども、確かに<自爆テロ>の映像は「君と僕のあいだに」突っ込んできたと、そうしかいえないこともありうる、そのことを作者の辻仁成は書こうとしていたと考えられる。

《世界貿易センタービルの南棟に二機目の旅客機が突っ込む直前、私は妻に、離婚をしようと宣告された。話をはぐらかそうとテレビを付けた私の目に生中継された自爆テロの映像が飛び込んできたが、何が起きたのかすぐには理解できなかった。激しく炎をあげて燃え盛る超高層ビルの映像は、非現実的過ぎて、すぐに意味を伴ってはやって来なかった。やがて私達は遠い世界で起こっている悲惨な出来事を少しずつ理解しはじめることになるが、実感はいつまでたっても固まらなかった。

二人はテレビを見つめたまま、長い間そこから動くことができずにいた。私は、キャスターがやや興奮気味に伝えるニュースに耳を傾けながらも、大変なことが起きてるな、と独り言を呟くのが精一杯だった。妻の顔は、今起きていることと、今まで起きてきたことが、内部で闘ぎ合って、怒っているような驚いているような、不思議な表情となっていた。それ以前に、妻はこの決意を私に伝えるため、早くからワインを呑みつづけているせいで、顔は真っ赤、しかも呂律が回らなくなっていた。彼女のおとなしい性格からすれば、これほどのことを素面で宣言するのは容易なことではなかったであろう。相当の決意を持って臨んだに違はなく、今夜の奇襲攻撃は準備周到に練られた作戦なのだった。

まさかその奇襲攻撃の最中に、これほどのテロのニュースが飛び込んでくるとは思いも寄らなかったはずで、出端を挫かれた恰好となった。アメリカでのこととはいえ、結婚して間もない頃、15年前に彼女が留学していたニューヨーク州立大学は、世界貿易センタービルからそれほど遠くなく、向こうに友人の多い妻にとっては、この事件は対岸の火事ではすまされないはずだった。夫婦にとっても一年間、世界貿易センタービルからすぐの、ソーホーの安アパートで暮らした思い出がある。バッテリーパークまで週末にはよく歩いて散歩をした。あの超高層ビルは、ニューヨークで暮らした最初の頃、英語もろくに喋ることが出来なかった私にとっては、現在位置を特定する目印でもあった。世界貿易センタービルを目指しては歩き、はぐれたら、その袂で落ち合った。寄り添う二本の巨大なビルは、向こう見ずに異国で暮らす二人をそのまま投影する希望のモニュメントであり、また自由の女神と並んで、アメリカを象徴する存在でもあった。「とにかくあなたとはもうやっていけないのよ。やっていけないのはお互いよく分かっているはず。分かっているながら自分たちを誤魔化すように、ここで、こんな風に何も無かったかの顔して暮らすのはもううんざり。でしょう？」

妻は虚ろな目で私を時折睨み、何度も言葉を詰まらせながら、どうかそういう内容の台詞を吐き出した。どこか自分に言い聞かせるような口調でもある。画面の中では旅客機が南棟に突っ込む瞬間の映像が繰り返し放映されている。半分の心はそこに釘付けになっているものの、もう半分は不意に殺伐となった食卓の上を彷徨っていた。》

以上が作品の冒頭部である。妻に離婚を宣告されている夫、そのときに映しだされて

いる世界貿易センタービルの南棟に二機目の旅客機が突っ込む生中継の映像。結婚間なしの二人にとっての行動の目印であったかつての世界貿易センタービル、と辿っていくと、ここにこの小説の主題が浮かび上がっている。目の前の離婚問題と、「遠い世界で起こっている」自爆テロの生中継の映像とはいくら同時発生だとしても、二人にとっては重なり合う事態ではなかった。世界金融の中枢を象徴する超高層ビルが突撃されようとも、世界がいま破壊されつつあるうとも、長年連れ添ってきた夫婦の関係が解消されようとする目の前の現実のほうが、二人にとって重大な岐路であることは疑うまでもなかった。離婚の危機と較べるなら、映像の中の悲惨な出来事など取るに足りなかった。

自爆テロにかかわりのなかった世界中の大半の人々は、その映像に衝撃を受けながらも、自分たちの生活の現実がことりとも音を立てていない安心を大きく感じ取っていたにちがいない。たとえ小説の中の二人のように、たまたま離婚騒動に見舞われている最中であつたり、あるいは家族の誰かが生死の分かれ目に瀕している深刻な事態に遭遇していたとしても、そうであれば尚のこと、人は目の前の重大事によって遠くの激動を更に退けてしまう習性を持っている。そのような人間の習性からすれば、いくら自爆テロの映像が衝撃的であろうとも、その直前に妻から唐突に離婚を宣告されるという「奇襲攻撃」がもたらす衝撃には、映像の衝撃はとても敵わなかった。そうであれば、小説は自分たちの離婚騒動の前には、どんな遠くの大事件も無関係でしたということになり、自爆テロの映像などわざわざ意味あり気に持ち出す必要はなかった。

もちろん、冒頭からいきなり、「世界貿易センタービルの南棟に二機目の旅客機が突っ込む直前、私は妻に、離婚をしようと宣告された。」と小説は始まったのだから、妻が離婚を振りかざして、旅客機の如く夫に突っ込んでくる出来事が描かれなくてはならなかった。つまり、自爆テロの旅客機に突っ込まれる世界貿易センタービルと、妻から離婚を宣告される夫とが二重写しになって描かれなくてはならなかった。作者はその仕掛けとして、ニューヨークの安アパートで暮らしていた二人の生活に、単なる無機質的な超高層ビル以上の希望の目印を射し込んでくる風景として、世界貿易センタービルを書き込んだのである。

「寄り添う二本の巨大なビルは、向こう見ずに異国で暮らす二人をそのまま投影する希望のモニュメントであ」ったなら、二人の生活を嵌め込んでいた世界貿易センタービルを中心とするかつての風景は、その超高層ビルが直撃されたとき一変し、同時にその風景から飛び出してきている現在の二人の生活は、風景の歪みのなかで新婚生活の記憶が無理矢理変更されていく感覚を味わわなくてはならなかった。「寄り添う二本の巨大なビル」に庇護されるようにして育まれてきたかつての二人だけのつましい生活、現在の生活の根っこの部分が、直撃された気分であつたにちがいない。世界貿易センタービルを見慣れてきたニューヨークっ子にとっては、目の前の風景の大きな激変は自分たちの心の中に宿っていた風景の大きな激変でもあつた筈だ。二人の関係が壊れていくように、映し出されている世界貿易センタービルが壊されていく。だが、自分たちの離

婚に実感が追いつかないように、映像の中の事態に対してもより一層遠い分、更に実感は引き離されていく。

《それほどの映像を見ているというのに、或いはそれほどの映像だからなのか、逆にあまりに凄すぎて、驚き以上のものが沸き起こらない。とてもそこにいるだろう人々の痛みまで、瞬時に共有できる余裕もなかった。わあ、と声を上げたきりである。わあ、の後は自分を落ちつかせるためか、取り敢えず、冷えたお茶をすすってみた。妻は、何、何が起ってるわけ、と呟いたきりである。テレビ画面から私も妻も目が離れない。けれど、まだ悲しみも憎しみも痛みさえ、生まれて来ない。》

《醜い事態だ、と意識の表面では思いながらも、心の一隅に、見事に冷静な自分がいる。ニューヨークで暮らした経験があるのに、何故か身近に感じる事ができない。世界貿易センタービルの倒壊、それもハイジャックされた旅客機によるテロ。これらの記号が、想像を越えた非日現実的なものであればあるほど、私の心を麻痺させるのである。》

今この時間、世界中がテレビに囁りついているはずだ、と私は考えた。西側の常識を正当化できない世界では、窓から降る人々や、崩れ落ちるビルを見て、歓声を上げていたりするのかもしれない。私も、あそこで働いていた人の家族と同じ気持ちでこのニュースを見ることは不可能だし、アメリカ人と同質の感情でこれを見ることも不可能である。まだ好奇心の方が強く、痛みや悲しみは正直、それほど強くはなかった。》

崩れていくビルの近くに住む妻の友人の安否を気遣いながら、「離婚どころじゃないな」と呟くと、《妻は、そうやって話をはぐらかす気ね、と声を擦りきらせて抗議した。その勢いで、彼女は離婚を宣言するまでの、長い間押し隠してきたという、自分の率直な気持ちというものを語りはじめた。私は繰り返し繰り返し再映される、世界貿易センタービルが地上から姿を消す映像を見ながら、それらの長大な説明を一応聞いた。どうしてそうなるのか、と思うような内容もあったが、人それぞれものごとの感じ方が違っているのは仕方のないことで、部分においては当然思い当たることもあり、反論は敢えてしないことにした。何より、彼女は酔っているし、世界は傾いている。この状態で何かを発言しても、現時点で正当なものを見分ける力など誰も持ってはいなさそうだ。》

翌日の夕方、文芸雑誌の編集者から自爆テロについてのコメントを要請されるが、妻との離婚問題でそれどころじゃないと断る。息子と妻はその夜は戻ってこなかったのも、九州にある妻の実家に電話を掛けると、父親が出て、《何でも話し合って決めてきた今までの二人からは想像もつかない事態である。いったい何がどうなっこうなってしまったのか、分からない。不条理だと言わざるをえない。向こうには向こうなりの理由があるに違いないが、私には全く見当がつかない》ことを伝えると、《父親は離婚には反対の態度を明確に取った。明確な態度といっても、イギリスやフランスやドイツがテロは絶対に許されない、と直ぐにアメリカ支援を打ち出したのとは少し違って、どこかの国の後方支援程度のものだろう。それでも、拒絶されるよりはましだったし、内心少しほっとした》。

原因を聞かれて、自分の存在そのものが嫌われており、「今は憎しみさえ持っていると言」われたことを話すと、次に浮気について聞かれたので、向きになって否定した。

《私は冷静さを失いつつある自分を戒めなければならなかった。どんな状況でも、冷静に対処しなければ、周りの理解をまず得なければ、本質のところで負けてしまう。》「時間をかけなさい。いますぐに答えを出したら、卓也が可哀相だ。君にとって世界でたった一人の息子なんだし」という《妻の父親のもっともらしい意見はテレビの中で、専門家たちが喋っている内容と大差がなかった。そうしているうちにも、テレビの中で世界は傾斜し続けていた。ニューヨークのジュリアーニ市長が、行方不明者が数千人に達するだろう。と伝えた。日本人で安否の分からない人の名前が次々に読み上げられていった。日本人までもが犠牲になっていると分かってはなお、私にはいまだ実感が湧いてこない。偽善に満ちた悲しみや怒りは言葉に表すことができたが、これほどのことが起きているというのに、私は腹も空いたし、酒を呷ることが平気でできた。当然、祈ることなどしなかった。

ただ一度、行方不明になっている息子の写真を持ち、途方に暮れて現場近くを彷徨っている老人の姿が、垂れ流しのテレビ画面に映し出された時だけは、思わず、目頭が熱くなるのを覚えた。》

机に向かって、《女性誌で連載している恋愛小説の原稿に目を通し（…）物語の海原へと飛び込もうとするが、飛び込めない。翌日、週刊誌の担当編集者からの原稿の催促の電話で起こされ、「死にたくなる時もあるさ」と呟いて、《電話を切った。その瞬間、私はあそこへ出掛けてみよう、と思い立つ。あそこに立てば、何が自分の心を塞いでいるのかが分かるような気がした。どれほどの瓦礫で魂が塞がれているのかを見る必要があった。テロリストたちが旅客機のコンピューターに、緯度経度をたたき込んだ場所。今は瓦礫の山となったかつてのモニュメントの袂。

その思いつきがなぜだか、その時は最高のアイデアに思えて仕方がなかった。そこに全部の答えがある、と私は確信していた。作家という身軽さも手伝って、鞆に荷物を詰め込むと、私はまもなく空港へと向かった。妻に存在を否定されても、世界貿易センタービルがテロにあって倒壊しても、何も感じることはない自分のこの不感症を見つめ直すためには行くしかない、 - 昔の正常な自分を取り戻すのに一番適した場所は、あそこしかない。現実が薄れていくのをくい止めなければならない。とにかく現場をこの目で見れば、自分がなぜ人々の悲しみや痛みを理解出来なくなったのか、が分かるような気がした。 - 或いは何故傍にいた妻の気持ちが分からなくなったのか、が分かるかもしれない……。》

タクシーに乗ってアメリカへ行くというと、運転手は飛行機は飛んでいないと笑いだし、その理由を尋ねるので、それまでの経緯を説明すると、「あなたがそこへ行っても、働いている人達の邪魔になるだけじゃないかな」と少し突き放したいいい方をして、北海道行きを勧めた。数時間後、5年ぶりの北海道の地に立ち、札幌を目指した。ホテルで

少し休んで、ススキノのラーメン横丁にある店に立ち寄ると、《テレビがニューヨークの続報を流していたが、行方不明者の数が5千人にのぼると伝えていた。5千もの人が一瞬に押しつぶされたのかと考え、箸が止まった。ニューヨークは爽やかな秋晴れなのに、そこだけが熱と煙と倒壊地獄なのだ。崩れ落ちるビルとともに、一瞬にしてあらゆるリアリティが消えた。》

ホテルへ戻って、携帯の留守電に入っていた担当編集者の悲痛な声に応えるように、《こんな時に他に何も書くことはないのか、と呆れるばかりの内容》の原稿を書き上げ、ファクスで送った。翌朝、ホテルに面していた中島公園の池のボートに乗って、漕ぎ出し、池の真ん中で漕ぐのを止めた。《不安定な水の上だが、奇妙なほど安らぎがあった。360度、見渡す限り、美しい景色に囲まれている。ホテルの上から見た時と眺めが違っていることに気がついた。ここに来なければ絶対に気がつかなかった風景があった。何がどう違うのか説明ができない。木は木だし、山は山で、空は空だ。ホテルの部屋から見た景色を言葉にすれば、そうなる。でも実際に今自分が見ている景色はこの池の真ん中までボートで漕ぎださなければ決して見るこのできなかった風景であった。

（中略）

誰にかけよう。誰にこの感動を伝えよう。誰だったら、この感動を分かち合えるだろう。誰だったら、今自分が見ているものを同じ気持ちで喜んでくれるだろう。これを共有してくれるだろう。必死に探したが、適当な人間はそこにはいなかった。興奮の後に、落胆があった。こういう時に電話をかけたいと思う人間がいないなんて。なんて寂しいんだ、と私は考えた。

残ったのは、親と息子の肉親だけであった。きっと彼らは自分が行方不明になったら本気で悲しんでくれる数少ない人間たちである。瓦礫の中を写真を掲げながら息子を探し続けるあの老人のことを思い出した。あの人は、あそこから瓦礫が全て撤去された後もきっと、消えた息子を探し続けるのであろう。そう思うと、何年か後に、整地された世界貿易センタービルの跡地に、花を植えている老人の姿があるような気がした。不意に悲しくなり、どこからともなく涙が出て、それが頬を伝い、自分のズボンの上に落ちた。北海道の、中島公園の、池の真ん中で……。

ハイジャックされた機内から携帯で、私は妻に、愛していたよ、と最後のメッセージを送ることができるだろうか。

『次のクリスマスは一緒に過ごせないけど、先に天国で待っている……』

頭の中に瓦礫の山が出現する。誰かを必死で探す自分がそこにいた。写真入りの手製のチラシを胸にぶら下げ、最愛の人の名を呼びつづける私。霞んだ視界の中で、途切れ途切れの人々の声を必死で聞こうとする私。誰かの名前を呼び続ける自分の声が聞こえた気がした。何に向かってか、祈る自分の姿を見た。手を合わせ、空に向かって祈る自分がいた。現実の方が幻よりも脆く消えやすい世界。憚ることなく泣いた。誰にも遠慮する必要もない場所で……。

誰にも見られていないはずなのに、何故か私をそっと覗く者があるように感じ、静かに振り返ると、そこに太陽があり、そこに山があり、そこに木があり、そこを風が流れていった。》

グラウンドゼロのニューヨークに行こうとして、足を向ける気のなかった北海道に来てしまった。そこで池のボートに乗り、「ここに来なければ絶対に気がつかなかった風景」に出会った。それは一体、どんな風景だったのだろう。自爆テロの映像を繰り返し眺めても、「自分がなぜ人々の悲しみや痛みを理解出来なくな」り、「何故傍にいた妻の気持ちが分からなくなったのか」、その答えを見出そうとして倒壊したビルの現場に立とうとしたのに、思いがけなく全く無関係な北海道の地に立つことになった。だがこの地に足を踏み入れようとも、一旦心に巣くった問いも、その答えを希求する気持ちも途絶えることはない。むしろ方向転換を余儀無くされただけに、問いも答えもより一層真剣さを帯びているかもしれない。

ホテルに泊まり、ススキノのラーメン横丁の店に行き、ホテルで原稿を書いてファクスで送るという、一連の行動には何の目新しさも覚醒もない。朝早く一人ボートに乗って、池の真ん中までボートを漕いでいったとき、自分が「360度、見渡す限り、美しい景色に囲まれている」ことに気がついたのである。日々の忙しさに追われた日常からはけっして垣間見ることのできない風景であり、たった一人きりの感覚であった。自分が微笑むと、周囲の風景も微笑み返してくれることがすぐに甘受される儂<sup>きょうこう</sup>の時間であった。だが、この至福は自分一人だけのものであり、共有する相手はこの世界のどこにもいないという寂しさを改めて確認しなければならなかった。

最も身近な最愛の人たちは、いま自分の許から去ろうとしている。残ったのはすべて瓦礫の山である。自分もまた、瓦礫の山を掻き分けながら、必死に最愛の人を呼びつづける者たちの一人ではないのか。このとき、ニューヨークの現場に立てなかった彼は、倒壊した世界貿易センタービルの「瓦礫の中を写真を掲げながら息子を探し続けるあの老人」の姿と、別の場所で折り重なる自分を見出していたのだ。最愛の人を失う悲しみは、寂しさは、国境も時間も越えて手を差し伸べ合う感情であり、そこで人はなにかに祈ることで必死に耐えようとする。たった一人で……。いや、そうではない。自分が気づいた風景があるように、自分に気づいた風景もあるのだ。「そこに太陽があり、そこに山があり、そこに木があり」、そこを流れる風があり、風に戦<sup>そよ</sup>ぐ一本の草花が、「祈る自分の姿を見」ていてくれるのである。最愛の人が去った場所を、そこに残った瓦礫の山さえをも、深く包み込んでくれる、自分がまだ出会っていない風景を探す旅はずっと続いていく、生き残っている以上は。

2002年2月3日記